
黄泉の国からこんにちわ

河 美子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黄泉の国からこみにちわ

【著者名】

ZZマーク

Z7545K

【作者名】

河 美子

【あらすじ】

ある日、突然おばあちゃんが死んでしまった。

「おばあちゃん、おばあちゃん起きて起きて
迫田真子は祖母の部屋から飛び出してきた。

「パパー、大変。おばあちゃんが、おばあちゃんがー

義母の貞子が亡くなつて1ヶ月。家中が妙に静かで居心地が悪い。まだ、70歳だつた。心臓マヒで寝込むことなく呆氣なく死んでしまつた。その前日、みんなで「ゴールデンウイークに近くの温泉に行こうと計画したばかりだつた。真子は小学校6年生、妹の法子は3年生。来年からは中学校生活だから今年が最後になるかもとう話だつた。計画の発起人は義母の貞子だつた。

本人が計画して死んでしまうなんて誰も予想していなかつた。義母は60歳まで学校給食の仕事していたから、退職金も年金も入るから、時々は娘たちだけでなく嫁の美沙子まで小遣いをもらうことがあつた。旅行も月に一度は出かけるほどで、今回の旅行もお金はおばあちゃんが出すといつ話だつた。

「ママー、旅行はもう行かないの？」

「うーん、そんな気にならないでじょう。計画した人が亡くなつたんだから」「だから」「だけどー」

妹の法子は口をとがらせていた。真子は妹を慰めながら「でも、旅行好きのおばあちゃんだから、出かけることを喜ぶかもしれないよ」

「うーん、パパと相談しましょ」

その夜、夫の総平は娘たちの願いを聞き入れた。行く場所は草津温泉。義母の計画通りに。

「いいのかなあ。おばあちゃんが亡くなつて温泉つて

「いいよ、母は旅行好きなんだから、『真でも持つてこいつやれ』『そうね』

そう話していると、電気がスースと消えた。

「おー、蛍光灯換えるから持ってきて」

「でも、替えがないわ」

「じゃ、明日買つてこいよ」

「はー、でも、まだ3カ月しか使つてないのに」

総平は安物買つたんじやないかとブツブツ言つていた。

「長持ちする高いのを買つたんだから。いやあね」

と美沙子が言つた途端、電氣がついた。

「なんか気持ち悪いわね」

2階の子供たちにも旅行の話を伝えてやひつと、階段を上ると

「美沙子さん」

「はい？」

今のはおばあちゃん。ぎょっとして後ろを見ると、にっこり笑うおばあちゃん。

「ひーっ、おばあちゃん。びうしてそこにいるの」

「そんなこと言つたつて。おじいちゃんは若い時に亡くなつてるから、私がそばに行つたら、こんなばあさん知らんつて言うのよ。ひどいと思わない？だから、帰つてきちゃつた」

「えーっ、帰れるんですか」

「でも、足が無いのよ、ほり」

「ひーっ、ば、ば、パパーーー！」

美沙子は階段をまっさかさまに落ちてしまった。驚いて出てきた総平は、妻が口から泡を出して倒れていのを見て、腰を抜かすところだった。娘たちは大音響にびっくりして部屋から飛び出した。

「ま、ママー！、大丈夫？」

「大丈夫よ」

「大丈夫って、泡を出してるじゃないか、母さん。母さん？」
振り向くと、死んだはずの貞子。

「えーえーえーっ！ 母さんどうして！」「元気！」

娘たちも倒れた。ババババババ……と言いながら。総平は立てなかつた。

貞子は楽しそうに笑いながら、自分の部屋に帰つて行つた。する

と、

「総平！ ベッドが無いじゃない！ どうやつたの」「母さんは死んだんだろ？ ベッドは処分したよ。仏壇置くために」「あらー、いやだあ、私の仏壇はこんな古くさいのー、もつとモダンのにしてほしかつたわ」

「仕方ないだろう。今さら帰つてこられても」

「なあに、あんたはいつからそんな冷たい子になつたの？ 折角旅行も行こうと計画してたのに」

「だけど、母さん。本気で帰つてくる気なの？ それはどうかなあ」「何がどうかなあよ、父さんだつて若い女の子が周りに元気じやいるから」機嫌なのよ、私なんかいなくても

訳わかんないよと総平は言いながら、倒れてる娘と妻に声を掛けた。

「おい、大丈夫かい。おばあちゃんは元気だよ」

その一言で、またみんなは倒れたのだった。

貞子は仏壇の写真も気に入らないようで、アルバムから若っこりの写真を選んでいた。

「総平、写真はこれにするわ」

部屋に来た総平は

「母さん、それは50歳のときでしきつ

「いいのよ、これが素敵だわ」

「分かつたから、早く帰つてやれよ、お父さんのとこへ」

「ふーっと、電気が消えた。

「いいよ、帰つてこなくても」

その声は、お父さん。総平は

「一人ともいい加減にしろよ。もつと仲良くなきないのー」

「お前はこれが母さんだつてこつけど、私が知つてゐ母さんはこつちの眞の人だから、このおばあさんは違つよ」

「違わないの！　お父さんは20年前に交通事故で死んだけど、お母さんはついての前まで生きてたの！　だから、この人があなたの嫁さん！」

「そりかなあ

「そりなの！」

「ああ、頭がおかしくなりそうだとつぶやきながら、総平は階下の妻たちの起きる気配に気がついた。

「パパー、どー？..」

「2階だ。親父までいて…しまつた」

あわてて口を押さえたが、妻が倒れる音がした。息子に冷たく言われたから、父親はがっくり来ていた。それを慰める貞子。

「やつぱり、こいつが貞子みたいだな」

「そうだよ、父さん。一人で仲良くあの世で暮らしてくれよ。墓参りは行くから。母さんをちゃんと連れて行つてやつて」

「ああ、邪魔したな」

「私も父さんと行くわ」

二人は仲良く手を取り合つて、2階の窓からぶーっと、空へ飛んで行つた。総平は大きく手を振りながら叫んだ。

「どうさーん、かあさーん、見守つてくれよー。来週、会いに行くからねー」

そう言いながら、ほほを伝つ涙をぬぐおうともしなかつた。下から娘が探している声がする。

「パパー、パパーどこにいるのー」

「こいだよー、おじいちゃんたちを見送つてゐるよー」

娘の倒れる音がした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7545k/>

黄泉の国からこんにちわ

2010年10月8日14時20分発行